

【論 文】

大学生用友人からのソーシャルサポート尺度のコロナ禍への修正†

上田 仁*・松浦 均*2

愛知県庁*・星槎大学*2

本研究の目的は、既存の大学生用ソーシャルサポート尺度をコロナ禍の実情に合わせて項目を修正し、信頼性および妥当性を検討することであった。本研究では、予備調査と2つの調査を通じて、コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度の項目を選定し、その尺度の因子構造の再現可能性ならびに内的一貫性、さらには他の変数との関連を検討した。その結果、コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度は2因子構造で構成され、因子構造の再現性があることが示された。また、内的一貫性があること、既存のソーシャルサポート尺度との関連や、性差との関連があることがわかった。しかし、抑うつ・不安との関連については一部でしか見られず妥当性の検証はさらなる追加検証が必要であった。以上より、本研究で修正された尺度はコロナ禍の実情を踏まえたソーシャルサポートを測定できうるものと考えられ、今後のソーシャルサポート研究の展望的議論や社会的混乱時の支援材料になりうるものである。

キーワード：ソーシャルサポート尺度，コロナ禍，大学生，信頼性，妥当性

1. 問題と目的

1.1. はじめに

新型コロナウイルス感染症は2023年5月に5類移行となり、現在(2023年10月)では、社会生活はコロナ禍以前に戻っているように感じられる。実際コロナに関するニュースや情報もほとんど見るのがなくなった。とはいえコロナ禍の渦中に経験した不安感やリスク対策が完全になくなったわけではなく、後遺症に苦しむ人の存在や、コロナ禍をきっかけに人付き合いや働き方が変化したことも事実である。理由はともかくマスクをしている人は現在でも多いし、従来の感染症への対策においてもコロナ禍が教訓になっていることは確かであろう。大学においては、ほぼ通常モードに戻っていると認識しているが、オンライン授業を希望する学生が一定数存在する(正路, 2022)など、学生の行動様式がコロナ禍以前と全く同じであるとは言い切れない。

本研究は空前のコロナ禍の社会状況を受けて始めたものであり、本研究の一連のデータは5類移行前に取ったもので、あくまでコロナ禍における大学生の様相を示すものである。しかし、学生のなかにはコロナ禍をきっかけにして社会適応に支障を来し、今も苦しんでいる者もいる。今後も社会的に極めて大きなリスクを伴い不安を喚起する甚大な災害が起きる可能性はあるわけで、本研究が、そうした災害発生時の学生支援方策、とくにメン

タルヘルス面における示唆になりえることを期待している。

1.2. コロナ禍における大学生生活

2020年1月から、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、私たちの生活には大きな変化が生じた。感染拡大の当時は、政府が緊急事態宣言やまん延防止等重点措置を発表し、感染症対策として外出自粛を奨励した。政府が打ち出した「新しい生活様式」により、対面での交流が難しくなり、オンラインでの交流や「3密」を避ける生活が一定期間続くこととなった。

生活の変化は大学にも影響を及ぼした。文部科学省(2021a)によると、新型コロナウイルス感染症対策の一環として2020年度(令和2年度)の授業をオンラインに切り替えた大学が全体の6割程度を占めることが示された。大学によっては対面での交流が制限され、大学生はコロナ禍以前とは異なる生活を強いられた。こうした状況の中で、社会では大学生の孤独が注目された。文部科学省(2021b)によると、大学生の悩みとして「友人との交流機会がない」や「友人をつくれない」といったものが挙げられており、その悩みは特に1年生に多く見られた。さらに、1年生の中には「大学に登校したことがない」(全国大学生協連, 2021)といったケースもあげられた。友人関係を築く機会が制約されたことが、大学生の望まない

孤独につながった可能性があると考えられる。2023 年度の現在においても、現在の 3 年生や 4 年生は在学中にコロナ禍を経験しており、また現在の 1 年生や 2 年生も高校生としてコロナ禍を経験しており、5 類移行となった現在においても大学生活のなかにコロナの影響が消えたわけではなく、残っている可能性はあるのではないかと。

1.3. コロナ禍におけるソーシャルサポート

それではいったい、人々はコロナ禍ではどのようなストレスを抱えていたのだろうか。Campo-Arias et al.(2020)は、エピデミックに起因する情緒的 well-being への影響を測定する尺度として PSS-10-C を作成した。PSS-10-C は「パンデミックのことで神経質やストレスに感じる」、「エピデミックに関することが自分自身では統制できないと困っている」と内容が含まれていた。他に、Qiu et al.(2020)は過去 1 週間でエピデミックによる不安、抑うつ、頻度、特定への恐怖、認知の変化、回避・脅迫行動、身体的症状、社会生活機能の喪失について測定する COVID-19 Peritraumatic Distress Index を作成した。日本でも、厚生労働省(2020)がコロナ禍におけるストレスに関する調査を実施し、自分や家族の感染、医療用品の入手困難、旅行制限、医療機関へのアクセス制限、家族・友人との面会制限などがコロナ禍におけるストレスの要因として挙げられた。これらの研究の結果をまとめると、コロナ禍でのストレスについて顕著なのは、コロナウイルスの感染に関連する身体面での悩みや不安によるストレスと、外出制限をはじめとする諸々の行動規制から来る精神面でのストレスということである。とくに後者は、旅行や娯楽活動ができないこと、友人や離れて暮らす家族と対面では会えないといった人的交流やコミュニケーションに関するストレスであった。実際に日本では、8 割の人が新型コロナウイルス感染症に関連してストレスを感じ、約半数の人が恐怖や不快感を示していた(Midorikawa et al., 2021)。さらに De France et al.(2021)は、大学生の不安と抑うつについて、コロナ禍以前とコロナ禍との得点の個人差を追跡した。その結果、コロナ禍になってから不安と抑うつ得点がこれまでとは異なると示した。これらの結果は、コロナ禍による生活の変化が不安やうつ病を誘発する可能性があると考えられた。

以上のことからコロナ禍では、感染することによる身体的な不調と同時にメンタル面の不調も大きな問題となることが明らかにされ、メンタルヘルスの維持向上のための支援策を考えることが喫緊の課題と言える。

メンタルヘルスへの支援策としては、コロナ禍以前から、ソーシャルサポートがあげられる。ソーシャルサポートとは、ある人を取り巻く重要な他者から得られる

様々な形の援助と定義され(久田, 1987)、ソーシャルサポートが大学生活におけるストレスの緩和に寄与していた(嶋, 1992)。コロナ禍でも、ソーシャルサポートを受け取っている人ほどコロナへの不安や孤独感が低いこと(Xu et al., 2020)や、家族や友人からのサポートが抑うつを軽減すること(Liu et al., 2021)が明らかにされた。

しかし一方で、橋本(2021)はコロナ禍でのソーシャルサポートがストレスへの緩衝効果や直接効果を示さなかったことを指摘し、その理由として、コロナ禍ではサポートティブなコミュニケーションが難しくなり、サポートを意図した相手との関わりがかえって不安や落ち込みを煽ること、経済的困窮に悩んでいるのに「慰め」ではあまり効果的ではないことを挙げている。さらに Ang(2022)も、コロナ禍ではサポートと抑うつに関連が弱いことを明らかにしたが、対面での交流が社会的に制限されたコロナ禍においては、サポートを取り巻く環境そのものに変化が生じていたためではないかと指摘した。以上から、コロナ禍におけるソーシャルサポートについては、改めて議論が必要と考える。

このような観点からコロナ禍におけるサポート研究に着目すると、コロナ禍の状況を踏まえたソーシャルサポートを測定できる尺度は存在していない。そこで、本研究ではコロナ禍特有のストレスやサポートを取り巻く環境に着目し、既存のソーシャルサポート尺度をコロナ禍に合わせて修正をすることを目的とした。その方法として、初めに予備調査で大学生にコロナ禍でどのようなサポートがあったのか調査する。そして、得られた内容を、ソーシャルサポートの概念を広範囲に捉えている既存の尺度の考え方を基に整理していく。たとえば福岡・橋本(1997)のサポート尺度は、行動の内容を「アドバイス・指導」、「なぐさめ・はげまし」、「物質的・金銭的援助」、「具体的行動」と包括的に定義し、嶋(1992)も包括的なサポート尺度を提案しているが、これらの尺度を参照枠として、コロナ禍のソーシャルサポートを整理する。そして、コロナ禍の実情に合わせて修正された項目で構成された新たな尺度について、その信頼性と妥当性を検証することを試みる。

2. 予備調査

既存のソーシャルサポート尺度をコロナ禍の実情に合わせて修正を行うために、予備調査では、コロナ禍の大学生にはどのようなサポートがあるのか調査を行う。そして、得られた内容から、既存のサポート尺度を、コロナ禍の大学生ソーシャルサポート尺度へと修正することを目的とした。

予備調査自体は、友人からのサポート、家族からのサ

ポート, 大学(主に大学教員)からのサポートの 3 側面からサポートの様相を収集したが, 本研究では友人からのサポートに焦点を当てて検討を行うことにする。

2.1. 手続き

2.1.1. 調査時期

2021 年 4 月末にオンライン調査を実施した。この時期は昨年度 1 年間のコロナ禍を経験し, 新学期が始まった期間である。なお参考データとして調査日の新型コロナウイルス感染症の 1 日あたりの新規陽性者数は 4959 人(厚生労働省(2023)のオープンデータ: 2021 年 4 月 27 日時点)であった。

2.1.2. 調査協力者

WEB 調査サービスに登録している 20~24 歳のモニターの中から, スクリーニング調査で職種を学生と設定し, 2020 年度の時点で大学生だと回答した者を選出した。本調査では, スクリーニングで選ばれた 200 名を対象に調査を行った。

2.2. 調査項目

2.2.1. ソーシャルサポート

コロナ禍でのソーシャルサポートを具体的に明らかにするために, 「昨年度のコロナ禍の大学生活を振りかえって, 受けられてよかったと思うサポートをできるだけ具体的に記述してください」, 「昨年度のコロナ禍の大学生活を振りかえって, 受けたかったなと思うサポートをできるだけ具体的に記述してください」, 「昨年度のコロナ禍の大学生活を振りかえって, 自分がしてきたサポートをできるだけ具体的に記述してください」, 「昨年度のコロナ禍の大学生活を振りかえって, 自分がしてあげればよかったなと思うサポートをできるだけ具体的に記述してください」と尋ね, 記述させた。

2.3. 倫理的配慮

本調査はすべて, 三重大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号 No.2021-23)。

2.4. 記述データの整理

回答に不備があったものを除き, 190 名の記述データを分析のために使用した。この記述データには, 友人以外の他者(家族・大学教員等)からのサポートに関する記述データも収集していたが, 本研究では, 友人からのサポートに焦点を当てるため, 友人のサポートに関するデータについて検討した。友人からのサポートに関して合計 143 のエピソードが記述されたが, 同じ文言でのエピ

ソードも含まれていたため, 重複しているものを取り除くと 84 のエピソードが残った。これらのエピソードについて, カテゴリを作成し, カテゴリ内で項目を整理した。カテゴリ作成に際しては, 小林(1997)のソーシャルサポートの機能的側面の分類, 嶋(1992)および福岡・橋本(1997)のソーシャルサポート尺度を参考にした。その結果, 次の 4 つのカテゴリにエピソードを分類した。道具的サポート(例: オンライン上で友人と話しながら勉強に取り組んだ), 情動的サポート(Word や Zoom, Teams などのパソコンの使い方を教えてもらった), 情緒的サポート(例: コロナによって大学生活がどうなるのか不安を話せた), コンパニオンシップ(例: オンライン飲み会をした)であった。さらに, カテゴリを基に意味が重複している項目の整理を行ったところ, 33 項目となった。

その後, 得られた 33 項目に基づいて, 既存のソーシャルサポート尺度(福岡・橋本, 1997; 嶋, 1992)を修正するための項目を作成するにあたり, 既存の尺度の項目との表記や意味についての相違に関する検討を行い, 最終的に 27 項目を本調査で使用するものとした。

3. 研究 1

研究 1 では, 予備調査で作成された大学生用コロナ禍ソーシャルサポート尺度を用いて, 探索的因子分析を行い, 尺度の信頼性および妥当性の検証を行うことを目的とする。

3.1. 手続き

3.1.1. 調査時期

2021 年 7 月下旬にスクリーニング調査を行い, 本調査を同年 8 月中旬に Web で実施した。この時期について, 2021 年度(令和 3 年度)前期の授業が終了した時期である。なお参考データとして調査実施日の新型コロナウイルス感染症の 1 日あたりの新規陽性者数は 15318 人(厚生労働省(2023)のオープンデータ: 2021 年 8 月 5 日時点)であった。

3.1.2. 調査協力者

オンライン調査会社に登録している 18 歳から 24 歳の学生 4000 人を対象にスクリーニング調査を行った。その中から, 4 年制大学に通う大学生で, 教示文に「その他」に回答するように記載し指示通りに回答した者で, さらには IMC 項目(三浦・小林, 2015)の指示に従って回答した者を選出した。IMC 項目はオンライン調査で教示文を精読しない努力の最小限を検出するものである。これらの条件を満たす者を本調査の対象とし, その中から 400 人に対して本調査を実施した。

3.2 調査項目

3.2.1. コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度

予備調査で作成された項目を用いて、次のように教示をした。「令和3年度の前期の状況について、あなたの友人について最も当てはまるものに回答してください」とし、27項目、5件法(「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」)で尋ねた。

3.2.2. K6

Furukawa et al.(2008)のK6を用いた。K6は、うつ病・不安障害などの精神疾患のスクリーニングを目的として開発されたものである。6項目を5件法(「1.まったくない」から「5.いつも」)で尋ねた。

3.2.3. 大学生用ソーシャルサポート尺度

コロナ禍前に作成された既存のソーシャルサポート尺度と大学生用コロナ禍ソーシャルサポート尺度との関連を調べるために、嶋(1992)のソーシャルサポート尺度を用いた。12項目を5件法(「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」)で尋ねた。

3.3 分析方法

分析にはJASP0.16.4を使用した。

3.4 結果と考察

3.4.1. 基礎統計

調査の結果、有効回答者数は男性 115 人(平均年齢 20.670, 標準偏差 1.891), 女性 285 人(平均年齢 20.421, 標準偏差 1.535)であった。学年別では、1年生 81 人, 2年生 81 人, 3年生 91 人, 4年生 130 人, 5年生以上(院生など)17 人であった。居住形態については、実家に住んでいる者が 261 人, 1人暮らしやその他の居住形態を選んだ者が 139 人であった。また、本調査に回答した者が所属する大学のオンライン授業の実施状況について、オンライン授業の開講の割合が「0%から 20%」だと回答した者は 50 人, 「21%から 40%」が 43 人, 「41%から 60%」が 98 人, 「61%から 80%」が 83 人, 「81%から 100%」が 126 人であった。

3.4.2. 因子構造

探索的因子を実施する際、項目を削除する基準として因子負荷量が.40以上であることと、各項目が複数の因子に因子負荷量.40とならないように設定した。まず、平行分析を行ったところ、2因子が提案された。3項目で因子負荷量が.40を下回ったため、これらを順に検討をしてい

ずれも削除し、2因子が適当であると判断した。しかし、先行研究等から、他の因子構造も考えられる。たとえば久田ほか(1989)が、日本でのソーシャルサポート研究では機能ごとにサポート項目が分かれることは少なく、通常は1因子構造になりやすいと指摘している一方で、小林(1997)や嶋(1992)は4因子構造であることを報告している。加えて、本研究においても、そもそも予備調査の段階では4因子構造を仮定して記述データを整理していた。よって、統計的な観点からも2因子構造の妥当性について検証する必要があると判断し、それぞれの適合度を比較することとした。

そこで、1因子構造と2因子構造、4因子構造について、それぞれ誤差共分散を仮定せずに分析を行った。モデル適合度の結果は、1因子構造は、AIC=32003.805, BIC=32327.112, CFI=.805, RMSEA=.099, SRMR=.065, 2因子構造は、AIC=27683.176, BIC=27974.553, CFI=.883, RMSEA=.084, SRMR=.059, 4因子構造は、AIC=31703.413, BIC=320050.670, CFI=.53, RMSEA=.087, SRMR=.063であった。モデル適合度の結果から、2因子モデルが最も当てはまりよいものであった。したがって、2因子構造を採用して探索的因子分析(最尤法・オブリン回帰)を行うこととした。

最終的に得られた2因子構造(Table 1)について、第1因子は「コロナで不安になっている気持ちを聞いてくれる」や「コロナに関する悩み事を話せる」などといった内容を含み、これを「情緒的サポート」と命名した。第2因子は「授業の資料を見せてくれる」や「授業でわからないことがあったときに教えてくれる」といった内容を含み、「道具的サポート」と命名した。道具的サポートの中には「自分が授業を休んだ時に、体調についての心配の連絡をくれる」や「継続的に関わりをもつことができる」といった情緒的サポートにも読み取れるものが含まれた。しかし、授業を休んだ時に具体的に授業内容の情報を与えてくれることや継続的に関わることで大学からの連絡などの情報をもらえるという点で道具的サポートとも考えられたため、これらの項目は道具的サポートとした。 α 係数については、いずれも良好な値であった。

3.4.3. 大学生用ソーシャルサポート尺度との関連

次に、既存の大学生用ソーシャルサポート尺度との関連を調べるために、嶋(1992)のソーシャルサポート尺度との相関係数を算出した。相関係数は、情緒的サポートとでは $r = .847(p < .001)$, 道具的サポートでは $r = .863(p < .001)$ であり、高い相関を示された。これは、修正したソーシャルサポート尺度が、既存の尺度と高い相関を持っていることを示しており、コロナ禍でのソーシ

Table 1 コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度の探索的因子分析（最尤法・オブリミン回転）

	第1因子	第2因子	共通性	平均値	標準偏差
情緒的サポート($\alpha=.924$)					
コロナで不安になっている気持ちを聞いてくれる。	.904	-.099	.293	3.373	1.330
コロナに関する悩み事を話せる。	.875	-.078	.321	3.643	1.258
コロナに関する事で悩んでいるときに、相談にのってくれる。	.793	.059	.305	3.442	1.293
オンライン授業の悩みを話せる。	.776	.009	.388	3.752	1.287
オンラインでのコミュニケーションのとりづらさを話せる。	.731	-.064	.525	3.580	1.260
ZoomやLine等で悩みを聞いてくれる。	.682	.104	.428	3.540	1.381
コロナによって大学生活がどうなるのかの不安を話せる。	.636	.143	.452	3.717	1.285
進路や就活の相談にのってくれる。	.611	.133	.499	3.450	1.377
体調などの不安を話せる。	.587	.226	.424	3.550	1.314
ZoomやLine電話でおしゃべりすることができる。	.571	.078	.607	3.630	1.443
新しい趣味を紹介してくれる。	.534	.172	.561	3.020	1.382
Zoomや電話等で話しをしながら勉強に取り組める。	.497	.168	.611	2.978	1.547
対面で会うのを控えてくれる。	.451	-.306	.890	3.435	1.109
道具的サポート ($\alpha=.920$)					
授業の資料を見せてくれる。	-.065	.873	.311	3.875	1.319
授業でわからないことがあったときに、教えてくれる。	-.010	.830	.322	3.895	1.266
対面で一緒に授業の勉強に取り組める。	-.058	.736	.514	3.415	1.547
大学からの連絡を教えてくれる。	.093	.687	.434	3.632	1.348
対面で会える。	.053	.684	.480	3.895	1.313
書類や課題の提出日を忘れないように知らせしてくれる。	.081	.612	.552	3.277	1.432
一緒に外出できる。	.260	.484	.528	3.627	1.405
体調を崩したときに助けてくれる。	.336	.479	.440	3.300	1.353
自分が授業を休んだ時に、体調についての心配の連絡をくれる。	.322	.444	.505	3.362	1.382
WordやZoomや、Teamsなどのパソコンの使い方を教えてくれる。	.295	.438	.546	3.397	1.454
継続的に関わりをもつことができる。	.397	.409	.455	3.908	1.238
因子間相関	.678				

ャルサポートを測定するのに適していることを示唆する。しかし、相関係数が高いため、嶋(1992)の尺度との弁別性が低いとも考えられる。本調査では既存の尺度を基に項目をコロナ禍に合わせて修正しているため、既存のソーシャルサポート尺度との相関が高くなることは予想される。

3.4.4. K6 との関連

従来のソーシャルサポート尺度の研究では、抑うつとの関連がみられていた(Cohen et al., 2000 など)。そこで、コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度と K6 との相関係数を見ると、情緒的サポートは $r=.167(p<.001)$ 、道具的サポートは $r=.174(p<.001)$ で、いずれも有意な負の相関がみられた。つまり、コロナ禍でのソーシャルサポートが不足している場合、抑うつ・不安症状が高まる可能性があることを示唆している。

3.4.5. 研究1 まとめ

研究1では、既存のソーシャルサポート尺度を基にし、予備調査を行った上で、コロナ禍に合わせたソーシャルサポート尺度へと項目を修正し、調査・分析を行った。探索的因子分析とモデル適合度の結果から2因子構造が適当であると考えられた。得られた尺度は、コロナ禍の状況に合わせて項目が修正されており、従来の研究と同様に抑うつ・不安症状との負の相関がみられた。しかし、1回での調査結果では再現性に欠け、妥当性についても議論の余地が残る。そのため、研究2では確証的因子分析を行い、K6との関連、性差などを含めてさらなる信頼性・妥当性の検証を行う。

4. 研究2

4.1. 調査目的

研究2の目的は、研究1から得られた大学生用コロナ

禍ソーシャルサポート尺度の追加の信頼性・妥当性の検証を行うことである。その方法として、研究1とは異なるサンプルを対象とし、2因子構造で確証的因子分析を行い、適合度を調べる。さらに、再検証としてK6との相関分析、従来のソーシャルサポート研究で指摘されている性差(嶋, 1992)についての検討を行う。

4.1.1. 調査時期

2022年1月下旬から2月上旬にかけてスクリーニング調査・本調査をWebで実施した。なお参考データとして本調査実施日の新型コロナウイルス感染症の1日あたりの新規陽性者数は82015人(厚生労働省(2023)のオープンデータ: 2022年1月27日時点)であった。

4.1.2. 調査協力者

研究1で回答した者以外で5000人を対象にスクリーニング調査を行い、4年制大学に通う大学生で、「その他」に回答するよう求めた際に正しく回答した者、さらに、IMC項目(三浦・小林, 2015)に教示に従って回答した者を選出し、400人を対象に本調査を実施した。性差を検討するため、男女比については同人数になるように200人ずつと設定した。

4.2. 調査項目

4.2.1. 大学生用コロナ禍ソーシャルサポート尺度

研究1と同じ項目を利用した。「令和3年度の後期について、あなたの友人について最も当てはまるものに回答してください」と教示をし、24項目、5件法(「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」)で尋ねた。

4.2.2. K6

研究1と同様に、Furukawa et al.(2008)のK6を用い、6項目5件法(「1.まったくない」から「5.いつも」)で尋ねた。

4.3. 分析方法

分析にはJASP0.16.4を使用した。

4.4. 結果と考察

4.4.1. 基礎統計

調査の結果、有効回答数は男性200人(平均年齢21.020, 標準偏差1.680), 女性200人(平均年齢20.745, 標準偏差1.428)であった。学年別では、1年生94人, 2年生78人, 3年生79人, 4年生132人, 5年生以上(院生も含む)17人であった。居住形態別では、実家暮らしが262人, 1人暮らしやその他と回答した者が138人であった。また、

本調査に回答した者が所属する大学のオンライン授業の実施状況について、オンライン授業の開講割合が「0%から20%」だと回答した者は90人, 「21%から40%」が51人, 「41%から60%」が101人, 「61%から80%」が82人, 「81%から100%」が76人であった。

4.4.2. 確証的因子分析

まず研究1で得られた2因子構造への適合度を検討するために、確証的因子分析を行った。このモデル適合度は、AIC=26165.396, BIC=26456.773, CFI=.884, RMSEA=.086, SRMR=.053であった。さらに、修正指標を基に類似の内容を持つ項目に誤差共分散を仮定したモデルについての検討も行った。モデル適合度は、AIC=26026.139, BIC=26325.499, CFI=.906, RMSEA=.077, SRMR=.049であった。そこで、これら2つのモデルの違いを検定するために尤度比検定を行った。その結果、 $\Delta\chi^2(2)=143.258$, $p<.001$ であり、誤差共分散を仮定したモデルの方がより適合度がよいことが示された。なお、各因子の α 係数は情緒的サポートで $\alpha=.931$, 道具的サポートで $\alpha=.916$ であった。以上のことから、異なるサンプルでも2因子構造の適用が示された。したがって以下の分析では、各因子の項目得点を加算し平均したものを、尺度得点として使用し分析を行う。大学生用コロナ禍ソーシャルサポート尺度の下位尺度の基礎統計は、情緒的サポートでは平均値3.537, 標準偏差0.925, 道具的サポートでは平均値3.704, 標準偏差0.943であった。

4.4.3. 性差の検討

先述のように、ソーシャルサポートは性差が存在することがあるため、性差の検討を行った。その結果、情緒的サポート($t(398)=3.796$, $p<.001$, $d=.380$), 道具的サポート($t(398)=4.379$, $p<.001$, $d=.438$)といずれも、女性の方が男性よりも有意に高い値であり、中程度に近い効果量を示していた。この結果は、コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度が、性差についても既存の尺度と同様の傾向を示唆しており、性差の観点から妥当性が検証された。

4.4.4. K6との相関分析

コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度の下位尺度とK6との相関分析を行った。その結果、情緒的サポートは $r=.080$ (*n.s.*), 道具的サポートは $r=.118$ ($p<.05$)であった。情緒的サポートとK6では有意な負の相関はみられなかったが、道具的サポートとK6とでは有意ではあるがかなり弱い負の相関しかみられなかった。

5. 総合考察

本研究は、既存のソーシャルサポート尺度をコロナ禍に適したものに修正することを目的として行われた。まず、大学生がコロナ禍においてどのようなソーシャルサポートを受けているのかを把握するために予備調査を実施した。研究1および研究2では、既存の大学生用ソーシャルサポート尺度を予備調査の結果に基づいて修正し、その信頼性・妥当性の検証を行った。

研究1では、コロナ禍でのソーシャルサポートを測定する項目が整理された。探索的因子分析の結果、2因子構造が最適であると示された。さらに、モデル適合度の比較をし、2因子構造のモデル適合度が他のモデルに比べて適合度が高いことが示された。研究2では、確証的因子分析を行った結果、2因子構造のモデル適合度は良好な値を示していた。また、既存のソーシャルサポート尺度と本研究の尺度において、それぞれの下位尺度同士の相関を検討した結果、相関係数が高いことから、併存的妥当性があると考えられる結果であった。その上で、修正した尺度の項目はすべてコロナ禍特有の環境を前提とした修正がなされているため、既存のサポート尺度と比べて、コロナ禍の状況下のストレスに対応するソーシャルサポートを測定していたと考えられる。

コロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度の下位尺度と抑うつ・不安との関連についてはさらなる議論が必要である。本研究の結果は、相関については弱い関連しか示されなかったが、関連する研究として、Ang(2022)は、従来のサポート尺度がコロナ禍のストレスの一部しか測定できないため、コロナ禍におけるソーシャルサポートと抑うつの関連性が弱いと指摘していた。しかし本研究のコロナ禍用ソーシャルサポート尺度はコロナ禍の実態に対応しているため、抑うつとの関連性が低いという結果は他の要因によるものである可能性がある。たとえば、Xu et al. (2020)はコロナウイルスに対する不安や孤独感との関連を指摘しているし、上田・松浦(2022)では孤独感との関連を示している。そのためサポート尺度は抑うつとの直接的な関連を示すだけでなく、孤独感を媒介として抑うつを低減させるなど間接的な影響も考えられる。今後、本研究で修正された尺度を用いて孤独感やストレス、抑うつなどさまざまなメンタルヘルス指標との関連性を調べることが必要である。

また、性差については、下位尺度ごとで女性の方が男性よりも得点が有意に高かった。そのため、性差については従来の研究と同様の傾向が見られることが示された。

以上の結果から、修正されたコロナ禍用大学生ソーシャルサポート尺度は信頼性が高いことが示された。しか

し、妥当性については、既存のソーシャルサポート尺度との関連性が示されたのみで、抑うつとはほとんど関連が示されなかったため、今後の議論の余地が残る結果となった。この尺度はコロナ禍の社会情勢を反映したうえで、ソーシャルサポートを測定できるものとして期待されるが、さらなる追加の信頼性・妥当性の検証が必要である。

最後に、本研究では既存のソーシャルサポート尺度をコロナ禍用に修正を行うことを試みたが、5類に移行しコロナが明けたといわれる現在の状況において、この尺度を使って検討することはないかもしれない。また今後このような大きな社会的混乱が起きないことを切に望んでいるものである。しかし再びこのような災害が起きた場合において、災害状況下におけるソーシャルサポートの在り方に関する展望的議論のなかで、本研究がその一助になれば幸いである。

付記

本研究の予備調査は 2022 年度日本応用心理学会第 88 回大会（京都工業繊維大学）にて発表されたものを一部加筆・修正したものである。また、本研究の研究1・研究2は 2022 年度東海心理学会第 71 回大会（人間環境大学）にて発表されたものを一部加筆・修正したものである。

参考文献

- Ang, S. (2022). Changing relationships between social contact, social support and depressive symptoms during the COVID-19 pandemic. *The Journals of Gerontology. Series B, Psychological Sciences and Social Sciences*.
- Campo-Arias, A., Pedrozo-Cortés, M. J., & Pedrozo-Pupo, J. C. (2020). Pandemic-Related Perceived Stress Scale of COVID-19: An exploration of online psychometric performance. *Revista Colombiana de Psiquiatría (English Ed.)*, 49, 229.
- Cohen, S., Underwood, L. G., & Gottlieb, B. H. (Eds.). (2000). *Social support measurement and intervention: A guide for health and social scientists*. Oxford University Press.
- De France, K., Hancock, G. R., Stack, D. M., Serbin, L. A., & Hollenstein, T. (2022). The mental health implications of COVID-19 for adolescents: Follow-up of a four-wave longitudinal study during the pandemic. *The American Psychologist*, 77(1), 85–99.
- 福岡 欣治・橋本 幸(1997). 大学生と成人における家

- 族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.
- Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., Tachimori, H., Iwata, N., Uda, H., Nakane, H., Watanabe, M., Naganuma, Y., Hata, Y., Kobayashi, M., Miyake, Y., Takeshima, T., & Kikkawa, T. (2008). The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, 17, 152-158.
- 橋本 剛(2021). コロナ禍初期における大学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討: 社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて. 人文論集: 静岡大学人文社会科学部社会学科・言語文化学科研究報告, 71, 15-34.
- 久田 満(1987). ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題 看護学研究, 20, 170-179.
- 久田 満・千田 茂博・箕口 雅博(1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会論文集, 143-144.
- 小林 章雄(1997). ソーシャルサポート研究における諸問題 行動医学研究, 4, 1.
- 厚生労働省(2020). 新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査結果概要について(2020年12月25日)
<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/syousai.pdf> (最終閲覧日 2023年2月19日)
- 厚生労働省(2023). データからわかる-新型コロナウイルス感染症情報-
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html> (最終閲覧日 2023年5月8日)
- Liu, C., Huang, N., Fu, M., Zhang, H., Feng, X. L., & Guo, J. (2021). Relationship Between Risk Perception, Social Support, and Mental Health Among General Chinese Population During the COVID-19 Pandemic. *Risk Management and Healthcare Policy*, 14, 1843-1853.
- Midorikawa, H., Aiba, M., Lebowitz, A., Taguchi, T., Shiratori, Y., Ogawa, T., Takahashi, A., Takahashi, S., Nemoto, K., Arai, T., & Tachikawa, H. (2021). Confirming validity of The Fear of COVID-19 Scale in Japanese with a nationwide large-scale sample. *PloS One*, 16, e0246840.
- 三浦 麻子・小林 哲郎(2015). オンライン調査モニタのSatisficeに関する実験的研究 社会心理学研究, 31, 1-12.
- 文部科学省(2021a). 新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の学生生活に関する調査等の結果について https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (最終閲覧日 2023年2月19日)
- 文部科学省(2021b)大学等における令和3年度後期の授業の実施方針等に関する調査及び学生への支援状況・学生の修学状況等に関する調査の結果について(周知)(2021年11月19日)
https://www.mext.go.jp/content/20211119-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (最終閲覧日 2023年2月19日)
- Qiu, J., Shen, B., Zhao, M., Wang, Z., Xie, B., & Xu, Y. (2020). A nationwide survey of psychological distress among Chinese people in the COVID-19 epidemic: implications and policy recommendations. *General Psychiatry*, 33.
- 嶋 信宏(1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- 正路 真一(2022). コロナ禍での授業形態にかかる学生の意見調査: ハイブリッド授業, オンデマンド授業, リアルタイムでのオンライン授業 三重大学国際交流センター紀要17号(通巻第24号) 41-53.
- 上田 仁・松浦 均(2022). コロナ禍において大学生のソーシャルサポートは何と関連するのか——2020年11月の調査から—— 応用心理学研究, 48, 36-37.
- Xu, J., Ou, J., Luo, S., Wang, Z., Chang, E., Novak, C., Shen, J., Zheng, S., & Wang, Y. (2020). Perceived Social Support Protects Lonely People Against COVID-19 Anxiety: A Three-Wave Longitudinal Study in China. *Frontiers in Psychology*, 11.
- 全国大学生協連(2021)第56回学生生活実態調査の概要報告 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (最終閲覧日 2023年2月19日)

SUMMARY

The purpose of the present study was to revise the social support scale for college students during the COVID-19 pandemic and to assess the scale's reliability and validity. Factor analyses revealed that the 24-item social support scale for college students during COVID-19 comprised two factors related to emotional and practical aspects of social support, demonstrating high reproducibility for these factors. Additionally, the scale exhibited strong internal consistency

and reasonably high validity. Furthermore, the scale was associated with the social support scale for college students before the COVID-19 pandemic, as well as factors such as gender and depression. The results of this study suggest that the social support scale for college students during COVID-19 is a reliable and valid tool for evaluating social support, which could contribute significantly to research on social support and social policy.

KEYWORDS: Social Support Scale, Covid-19, College Students, reliability, validity

† UEDA Jin* and MATSUURA Hitoshi*² : Adapting the Social Support Scale for College Students with a Focus on Friends During COVID-19

* Aichi Prefectural Government Office, 3-1-2 Sannomaru, Naka-ku, Nagoya, Aichi 460-8501

*² Seisa University, 11 Nihonodori, Naka Ward, Yokohama, Kanagawa 231-0021